



KYODO ARCHITECTS & ASSOCIATES

2021

Architecture

社外報 持続可能な未来のために

INDEX

持続可能な未来のために . . . 02

TOPICS

東京さつきホスピタル：
—地域へつながる街並みづくり— . . . 03

WORKS

こころのホスピタル町田 . . . 05

下館病院 新A棟 . . . 06

真正会デイサービス 寿 . . . 07

児童発達支援センター すみれ園

K病院保育室 . . . 08

関西記念病院 認知症治療棟整備

浜寺病院 さくら棟・けやき棟 . . . 09

あさかホスピタル 森の棟（1期） . . . 10

COLUMN

新型コロナウイルスと
私たちの医療福祉建築 . . . 11

NEW MEMBERS

私の建築家像 . . . 13

編集後記

持続可能な未来のために

代表取締役社長 鈴木 慶治

2015年国連サミットで採択されたSDGsは、人類の共通目標としてここに来てやっと広く認識され始めています。未来のために、すべての地球上のひと（生物）が継続して生きやすい環境を作り、守るための社会システムを速やかに構築しなければなりません。しかし現実には、新型コロナウイルス感染拡大が進むこの期に及んでも政治家が経済か命かという選択さえ答えが出せないような状況です。（このような中でも、日々治療や介護にあたっている多くの医療・介護従事者・関係者とそのご家族に、まずはこの場を借りて心より敬意を表します。）

この新しい形のウイルスの流行は人間が経済的な豊かさばかりを追い求めた結果のようにも思えます。私たちは本物の豊かさ質の高い生活とは何か、そしてそれを支える建築はいかにあるべきか。を見つめなおす良い機会と考えています。ここ数年、建設コストの大幅な上昇もあって、私たちの業界においても、かつてのように効率の良い施設設計ばかりに評価が集まり、私たちもそこに意を尽くさざるを得ませんでした。目の前の便利さ経済性にも増して、皆を幸福にするための本物の選択を設計者の立場で今以上に発信できるようにしていかなければなりません。

私たちのように、同種の医療福祉の建築を数多く手がけ、複数のプロジェクトを経験すると、その建築に対する視点・方向に一定の傾向というものを見出すことになります。その傾向から生み出され、複数の施設で評価されたプランやディテールの蓄積や成功体験は、私たち医療福祉建築設計者の大きな財産であり、設計を進めるうえでの重要な手掛かりになり、まさに「発信すべき提案」になります。しかし、評価を得たはずの提案は、医療・介護手法の違いによってその評価が逆転することや、繰り返し使うディテールはその「かたち」が独り歩きをし、本来の趣旨を理解されないまま形になり、その施設にとって使いにくいものになってしまうことがあります。つくづく改めて建築がやはり「一品生産」であることを思い知らされ、常に基本に立ち返り、物事の成り立ちの意味をクライアントと共有することの重要性を感じます。

また看護・介護行為は施設ごとに同じではないこと、医療介護スタッフは一人一人がプライドを持つ専門職であり個々人で考え方が異なることを実感し、それがゆえに皆を幸福にする選択をすることの難しさを感じます。

SDGsはお互いの違いを認め合うことも大切な目標の一つとなっています。それぞれの個別性を認め理解するためには、今後ますます「質の高いコミュニケーション能力」の必要性を感じます。コロナ禍において、ひざを突き合わせ、お互いの呼吸を感じながらの交流は難しい時代です。新しい時代に相応しいその能力は私たち一人一人が独立した建築設計のプロフェッショナルとしての自覚を持ち、あらゆる分野に耳目を開き、自らを一層高めることにより、その能力を獲得でき充実するものと信じています。今後もその努力を欠かさず、「その建物を利用する全ての人の生活を豊かにする」という思いをプロジェクトの中で実現し、持続可能な豊かな未来を私たちなりに創っていきたいと思います。



品川道路よりA棟とC棟がつながりゲートとなる



案内図

特定医療法人研精会は、1957年、東京都調布市に精神科病院である「山田病院」を開設して以来、現在では東京都稲城市や神奈川県箱根町などに病院を、都内各所に老人保健施設や有料老人ホーム等を運営し、施設や組織同士が連携しながら広く地域の医療・福祉に貢献している法人です。

「山田病院」は開設以来増築を繰り返してきましたが、建物の老朽化に伴い移転新築することとなり、今から5年程前に声をかけていただきました。1972年に国内で最初に設立された精神障がい者の地域生活支援センター、就労支援事業所（設立当初は授産施設）が1駅隣にあり、長く地域で生活する精神障がい者の働く場、拠りどころとなる場を提供していましたが、今回の病院建替えに伴い、病院建物と一体化し、一新されることとなりました。今回の建替えでは、機能を集約すると同時に、より地域に開き、誰でもが行き交う「街並み」をつくることが計画の主眼の1つとなりました。



配置図

しかし、全ての機能を入れられるだけの敷地を確保することは困難で、結果的に道路を挟んだ2ヶ所の土地に3つの建物で構成することとなりました。工事手順上、C棟を先行して建設、まずは地域生活支援センター「希望が丘」や就労支援事業の拠点「創造農園」、法人の本部などを整備し、続けてA棟（病院本体）、B棟（デイケア）を建設しました。そして、山田病院は新棟完成と同時に「東京さつきホスピタル」という名前に改称し新たなスタートを切りました。

A棟完成時にはA棟とC棟が道路上空の渡り廊下でつながり、A棟に入り切らない病院機能をC棟に入れて成立させています。駅側（品川道路側）からは東京さつきホスピタルなどへ訪れた人のゲートとなるよう、A棟とC棟が一体的となるようなファサードを構築しました。この一連の建物群の玄関口は、どなたでも迎え入れ好き好きに佇んでいただけるよう、道路も巻き込んで広場のようなスペースとしています。

広場にはカフェや各施設の入口が面しています。また、細長い敷地形状を生かし、道路と建物との間に遊歩道をつくり、地域の方々にも日常的に歩いていただけるようにしました。

広場や遊歩道は地域との接点となり、病院利用者や病院スタッフと地域の方々が自然に交わり、病院と地域との距離感を縮める効果が生まれているように思います。

このことが、診察を受ける状況になった際、ハードルを感じることなく病院へアプローチしていただける一助となれば幸いです。



建物沿いの遊歩道は地域の方の通勤通学・散歩道に



A棟 外来窓口と待合がギャラリーストリートに面する



A棟 ギャラリーストリートから遊歩道が垣間見える

■ A棟

非常に細長い敷地に病院機能を配置しています。建物ファサードは個室的4床室の凸凹を利用して、壁面を分割して住宅地に溶け込むようなデザインとし、これにより街並みを形成することを意識しました。

1階には病院のメイン動線となるギャラリーストリートを外部の遊歩道と並行して設け、内部のプライバシーを守りつつお互いの様子が垣間見えるように配慮しました。さらに内側にはスタッフ専用動線を設け、利用者とスタッフとの動線を整理しています。

2、3階は病棟です。細長い敷地への配置は動線が長くなりがちですが、スタッフステーションから各所へできるだけ目の届く配置構成をとりました。病棟入口の手前にはラウンジ空間を設け、病棟内外をつなぐ中間領域とし、運用に応じて幅広く活用できるスペースとしています。

■ B棟

デイケアとスタッフの更衣室機能が入ります。諸々の事情で病院と一体にすることができませんでしたが、大きすぎないスケールの独立した建物は、地域の利用者が通う身近な「デイケア」に相応しいかたちになったと思います。屋根付きの外部通路で病院とは行き来でき、その道中には就労支援事業の1つである農作物を栽培する畑が広がっています。

■ C棟

3棟のうち1番はじめに竣工した建物です。1階のカフェは前面道路である品川道路や病院側に向かって開き、誰でもが気軽に立ち寄れる設えとしました。就労支援の1メニューを担うこのカフェは本格的な食事やコーヒーを提供し、今では地域のお子さん連れのお母さんたちや年配の方々など多くの方がランチやお茶に訪れます。1・2階には就労支援の作業所や拠点、地域生活支援センター、2階には法人本部と病院幹部、医局、スタッフ等合せた総合スタッフ室、3階にはスタッフの食堂や病院機能の一部である作業療法室が配置され、多種多様な方たちがひっきりなしに行き交いふれあう場となりました。



デイケアの入るB棟 手前には畑が広がる



C棟1階のカフェ「空と大地と」



病棟はオープンなスタッフステーションを中心に構成される



A棟 建具を開くと多床室のような構成の個室群

□ 建築概要

共通	所在地：東京都調布市
	建築主：特定医療法人研精会
	撮影(A・C棟)：増田寿夫写真事務所
A棟	病床数：156床
	構造規模：鉄筋コンクリート造 地上3階
	延床面積：5,719㎡
	竣工年月：2020年5月
B棟	施設内容：デイケア、職員更衣室
	構造規模：鉄骨造 地上2階
	延床面積：650㎡
	竣工年月：2020年3月
	撮影：ゼロワンコーポレーション
C棟	施設内容：地域生活支援施設・ 就労支援施設、カフェ、 法人本部、病院機能(作業 療法室、スタッフ室など)
	構造規模：鉄筋コンクリート造 地上3階
	延床面積：1,542㎡
	竣工年月：2019年3月



南側外観

周囲に多くの自然が残る東京都町田市の西部に位置する民間精神科病院の敷地内増改築プロジェクトになります。4層分の落差のある傾斜地に高圧送電線が横切る敷地は、建物の配置に大きな制約を受けましたが、個別な環境を確保した病室や豊かな周辺環境を生かした各種居場所を持ちつつコンパクトにまとまった病棟を実現することができました。急性期に対応した病棟や、地域の高齢化が進むなか、認知症や合併症に対応した病棟を4層重ねる構成となりました。ベッドまわりでのケアがしやすく、かつ個別な環境も確保できる個室的多床室とすることで、急性期にも高齢化にも対応が可能となります。その個室的多床室を3室向き合わせて配置することで廊下の面積は圧縮され、スタッフ動線の短縮・見守りのしやすさにつながります。またこれにより限られた容積を効率よく使うことができました。

アプローチ側の外壁デザインをタイルを組み合わせたチェック柄としていますが、「スタッフ」や「家族」が「患者」さんを支え地域生活を紡いでいることを象徴しています。

残る既存棟の改修も行い、病院全体

がリニューアルされました。将来の既存棟建替も視野に入れた配置計画としたことで、より一層地域の拠りどころとしての役割を担うための未来へのつながりも確保されました。



東側外観



個室の4床室



個室前

□建物概要

建築主：医療法人社団 天紀会
 所在地：東京都町田市
 病床数：378床（増築 195床）
 構造規模：鉄筋コンクリート造
 一部鉄骨造 地上6階
 延床面積：6,464㎡
 竣工年月：2020年1月
 （一部2017年10月）

撮影：増田寿夫写真事務所



談話スペース・食堂



南東側全景



食堂



南側全景



4床室前廊下

茨城県筑西市において地域精神医療を担ってきた病院における病棟建替計画です。平成18年に実施されたB病棟建替え工事(100床/当社設計監理)では、病棟のユニット化、個室化により、個々の症状に柔軟に個別対応が可能な環境が整えられました。

B病棟の建替え時に策定された全体マスタープランにおいて第3期計画に位置付けられる今回の計画は、老朽化が進むA病棟を新たに認知症治療病棟として建替え、病床数のダウンサイジングに合わせて、病棟機能の再整備を図るプロジェクトとなります。

認知症治療の専門病棟として、「わかりやすい明快な空間づくり」、「季節や時間の流れを感じることでできる開口部計画」、「自分の居場所を認識し易くする色彩計画」の実現に努めました。

また、低層でゆったりと敷地に広がる既存棟の、さわやかに敷地に溶け込むたたずまいを継承できるよう外観の検討を行いました。勾配屋根を踏襲し、左官仕上げ、タイル張り、コンクリート打放し仕上げという、既存棟の構成要素を用いることで調和を保ちつつも、濃色のタイルをアクセントとして配色して、新たな病棟としての印象を持たせました。



4床室

□建物概要

所在地：茨城県筑西市
 建築主：医療法人社団平仁会
 病床数：50床(全体154床)
 構造規模：鉄筋コンクリート造
 地上1階
 延床面積：1,396㎡(全体10,198㎡)
 竣工年月：2019年8月
 撮影：増田寿夫写真事務所



食堂(手前)とフィットネス

既存の特別養護老人ホームのデイサービスセンターのスペースの不足により、隣地に別棟で計画された、比較的介護度が低い方々が、自立的に過ごすことを意図したデイサービスセンターです。低層の住宅街に馴染むよう、2階のスタッフエリアを勾配屋根のふところを利用しながら作ることで高さを抑えた木造としました。そして1階の食堂とフィッ

トネス、2階の会議室は小屋組を見せるインテリアとしています。1階は建物の中央に利用者の居場所となる食堂を設け、周囲に少人数で使える小部屋を用意し、利用者がそれぞれ好みの活動ができる空間を用意しています。外部には土間につながる回廊を設け、隣地の真寿園の庭を囲い、一体の外部を楽しめるよう設えました。



屋内の用途に使える土間



小屋裏を利用した会議室

□建築概要

所在地：埼玉県川越市
 建築主：社会福祉法人 真正会
 施設内容：デイサービスセンター
 構造規模：木造 地上2階
 延床面積：684㎡
 竣工年月：2019年12月
 撮影：千葉顕弥写真事務所

児童発達支援センターすみれ園



北西面全景

既存施設を運営しながらの建替工事です。狭小空地を利用するため3階建ての計画としました。1階に指導室4室と多目的室1を、2階に事務室と厨房、多目的室2、3階に放課後デイ、会議室、屋上プールの構成です。指導室は多目的室1(主遊戯室)を介して中央階段より2階及び3階と直接つなぎ、スタッフ動線の効率化を図りました。

多目的室2(食事スペース、演芸室、式場、遊戯室)は食事スペースの分離、隣接キッチンが見える化により情緒の安定に寄与しています。元気な子供たちは、施設の重層化により適度な刺激を与えられ縦動線を楽しんでいるようです。周辺に建物がないので、2階からはカラフルな列車や遠景を見渡せる眺望が楽しめるよう配慮しました。



2階 多目的室2



2階から園庭(運動会)を望む

□建物概要

建築主：社会福祉法人 宰府福祉会
 所在地：福岡県太宰府市
 施設内容：児童発達支援センター
 定員：児童発達支援：35名
 放課後等デイ：10名
 構造規模：鉄骨造 地上3階
 延床面積：946㎡
 竣工年月：2019年8月
 撮影：リンク福岡



0才児室



2階 玄関ホール



1才児室からテラスを望む

院内保育室の建替えを機に病児・病後児保育室を併設した計画です。

院内保育室は、人数やシーンに応じて様々な使い方ができるように、可動家具や開け放てる引戸で部屋を仕切っています。テラスは吹き抜けのある半屋外空間として設え、室内に光を導き入れると共に、多少の雨や日差しを気にせず過ごせるようにしました。

2階に設けた病児・病後児保育室は、病中または病気の回復期にある子供を一時的に保育する施設です。体調や年齢の異なる子供達がそれぞれ落ち着いて過ごせるよう、また感染対策上の配慮から、保育室は二室に分割することができるようになりました。独立した小部屋も二室備え、個別のケアができるようにしています。

□建築概要

所在地：東京都
 施設内容：院内保育室（定員 30 名）
 病児・病後児保育室、他
 構造規模：鉄骨造 地上 2 階
 延床面積：499㎡
 竣工年月：2020 年 9 月
 撮影：佐藤高久写真事務所

関西記念病院 認知症治療病棟整備



病棟（左：病室、右：介助浴室）

2001 年増築から継続的に携わっている病院の改修プロジェクトです。2009 年に大規模増築をし、病院機能の再編成と既存病棟（本館）改修を行っていますが、今回、認知症治療病棟の開設に向け、本館 3 階病棟の再改修を行いました。病室の一部を介助浴室や生活機能回復訓練室に改修し、車いすトイレ新設や内装更新を実施しています。また、38 年間使われてきた旧型保護室を改修し、堅牢さと安全性に配慮しつつ居住性を向上させた保護室リニューアルも行っています。

□建築概要

所在地：大阪府枚方市
 建築主：医療法人 亀廣記念医学会
 病床数：改修 51 床（全体 307 床）
 構造規模：鉄筋コンクリート造 地上 4 階
 延床面積：改修 935㎡
 （全体 11,241㎡）
 竣工年月：2020 年 7 月
 撮影：アトリエ K Photo office



介助浴室：病室を介助浴室に改修



保護室：保護室のリニューアル



さくら棟(左手前)2020年8月竣工/けやき棟(右奥)2018年4月竣工

大阪府南西部、大阪中心部と関西空港の中間部に位置した高石市にある精神科病院です。1930年に開院され、地域の精神科医療の基幹病院となっています。敷地はベッドタウンの閑静な住宅街の中にあり、敷地南側には桜の見事な公園に面しています。長年の施設整備によって敷地いっぱいに既存棟が建ち、一度に建替えができない為、病院運用を継続しながら3期に渡り全面建替を行う事としました。2015年に着工し、2016年にⅠ期「はなみずき」棟、2018年にⅡ期「けやき」棟そして2020年8月にⅢ期「さくら」棟が竣工しました。既存建物解体と外構・アプローチ整備を進め、2021年秋にランドオープンを向かえる予定です。誰もが心を休めに立ち寄れる「地域に開かれた森の病院」として、木の素材に包まれ、公園の緑も取り込んだ豊かな

治療環境となるよう計画しました。

病棟は全体が見渡せるオープンカウンターのスタッフステーションを中心に、公園や山並みを望む食堂や談話スペースを設け、敷地の制約を感じさせない開放感のある構成としました。様々な症状の患者にも対応できる病床ゾーニングや個別化、さくら病棟には個室率50%・60床の精神科救急病棟を新たに設け、機能の充実化を図りました。

□建築概要

所在地：大阪府高石市
 建築主：医療法人 微風会
 病床数：642床(全体)
 構造規模：鉄骨造 地上8階 地下1階
 延床面積：23,401㎡
 竣工年月：2021年秋予定(全体)
 撮影：増田寿夫写真事務所



木のオープンカウンターと病棟食堂



公園の緑を引き込む2階屋上庭園



木の焼印サイン



公園を望む1床室



羽目板仕上げの個室的4床室



東側外観

あさかホスピタルは、2008年にD棟が竣工した後、A棟（1999年竣工）と3つの既存建物を使い運用されています。「森の棟」はそのうち2つの既存建物を建替え、病院全体の機能を再編成するプロジェクトです。病院運営を継続しながらの建設となるため工事は3期に渡り、全体が完成するのは2023年になります。今回紹介するのはその1期目となります。

「森の棟」1期の主な機能は通所機能と病棟機能です。1階はデイケアセンター、2階は合併症病棟、3階は認知症治療病棟、4階は県内初となる児童思春期病棟という構成です。

病棟内はゾーンごとに異なる機能を

持った病室を設けることで、それぞれの病棟の専門性に合わせた構造とされています。同時に個室の多床室の採用や共用部の充実等、あさかホスピタルプロジェクトでこれまで大切にしてきた、豊かな治療・療養環境を作ることを目指しました。

2, 3期では、メインのファサードを新たにし、外来や検査機能の拡充、ホールやレストランなどが完成します。同時に外構と、ホスピタルアートの整備も行っていきます。地域の医療の拠点として、また多くの人にとっての居場所となるようプロジェクトを進めていきます。



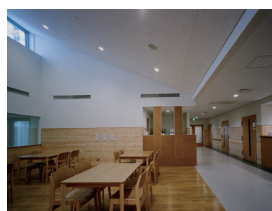
デイケア



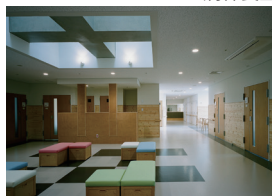
病棟食堂



4床室



病棟食堂



1床室前廊下・談話

□建築概要

所在地：福島県郡山市
 建築主：社会医療法人
 あさかホスピタル
 病床数：142床（1期）
 （全体495床）
 構造規模：鉄筋コンクリート造
 地上4階（1期）
 延床面積：増改築 7,342㎡
 （全体1-3期：12,415㎡）
 竣工年月：2020年9月
 撮影：増田寿夫写真事務所

新型コロナウイルスと私たちの医療福祉建築

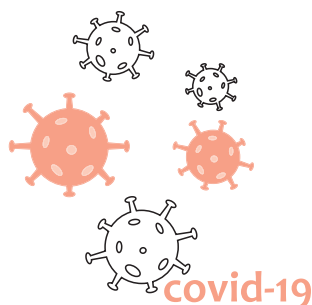
■医療福祉建築研究会の取り組みから見てきたこと

私たちは医療福祉建築の知見を深め、各プロジェクトに活かしていくための活動として通年で「医療福祉建築研究会（以下、医福研）」を社内で開催しています。やや特殊な病院建築設計の研修や、講演会参加者による報告会などをこれまで行ってきました。設計の初心者から熟練者まで、実務のみにとらわれず基礎を固めて情報のアップデートをし、共同建築設計事務所の理念を再確認する活動となっています。

このような中で2020年、私たちは新型コロナウイルス（COVID-19、以下、新型ウイルス）に直面しました。これまで協働してきた医療、福祉の現場がいままでにない困難に立ち向かう姿を目の当たりにして、医福研の中で本年前期のテーマを「新型ウイルス」にすることは自然な流れでした。

まだ未知の部分が多い新型ウイルスですが、緊急事態宣言以降のクライアントからのご要望、医福研で所員が共有した様々な機関から発信される新型ウイルスの情報から見てきたことがあります。それは、これまでも共同建築設計事務所が大事にしてきたことをより丁寧に掘り下げることが、新型ウイルスから身を守りながら臨機応変で持続的な医療福祉建築/施設の運営を可能にするのではないかと、いう手ごたえです。

これまでは、感染症対策という視点では大きく語られることがなかったものの、私たちが様々な医療福祉建築の設計の中で大事にしてきた右記の4つのキーワードと事例をご紹介します、今後の計画の視点として提示できればと考えます。



個室化

感染症対策という意味で、個室化以上に合理性と説得力のある方法はないのでしょうか。私たちは、多床室であっても部屋の形状、家具や窓の配置によって個室的に使えるプラン（個室的多床室）を提案してきました。近年は、極力個室率を高めつつ、それによって長くなってしまいがちなスタッフ動線をできるだけ短縮するため個室群形状を提案しています。

個室化のメリット（平時）

- ・プライバシー確保
- ・匂い、音が気になりにくい
- ・個別的な温湿度、明るさのコントロールがしやすい
- ・ベッドコントロールの減少
- ・十分なケア空間設定が可能
- ・個別の家具、ベッド配置可能



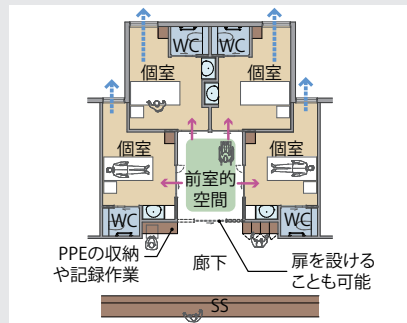
【家具で仕切った個室的多床室の実例】
ベッドごとに個別的环境をつくる

個室化のメリット（感染症拡大時）

- ・患者同士の飛沫・接触感染リスク低減
- ・スタッフの感染管理のしやすさ
- ・陽性者退院後の清掃、空白期間を設けやすい
- ・個別の洗面、便所が利用できる

【個室群形状とした場合】

- ・個室前の空間を前室として、陰圧室の設定や防護服着脱スペースとして活用できる



【個室群形状の提案】
前室的な空間が、防護具着脱やPPE置き場として活用できる

ユニット化と機能の分散化

ユニット化は個別的なケアを可能にするため、大人数で一斉的な食事や入浴といった感染対策上管理の難しい場面を作らずに済むことに寄与しています。また機能が分散化していることで、限られた空間の中でも生活を完結させることが可能です。

ユニット化と分散化のメリット（平時）

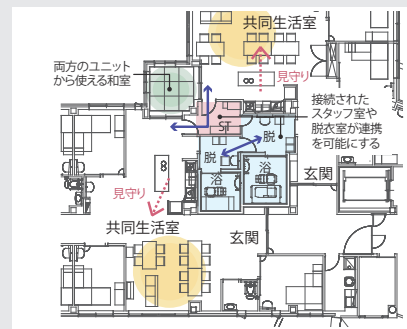
- ・生活に必要な機能がより身近な範囲でそろう
- ・固定的なスタッフの関わりが安心を生む
- ・家庭的な雰囲気生活できる
- ・個別的なケアがしやすい



【ユニットの食堂・居間の実例】
ユニット化により住宅的なスケールの生活環境がつけれる

ユニット化と分散化のメリット（感染症拡大時）

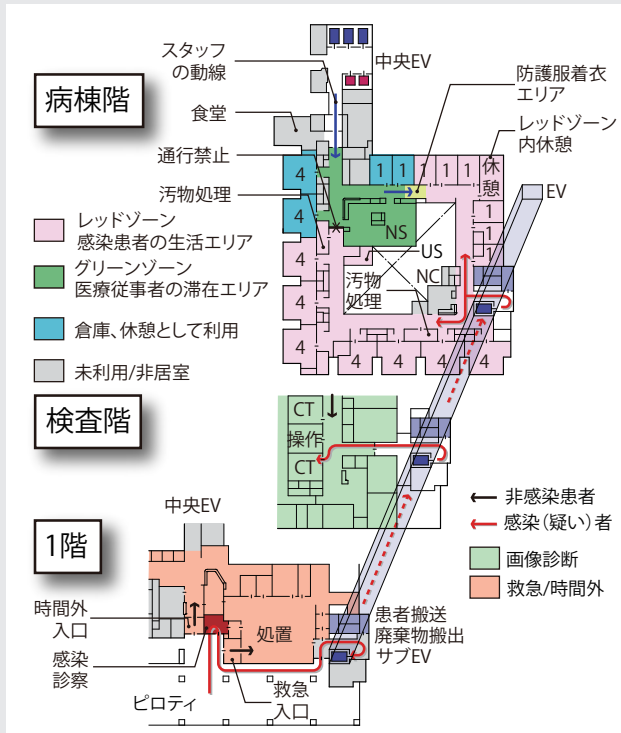
- ・共有空間を固定的な利用者、スタッフで使用するため、集団的な場合と比べ感染リスクを低減できる
- ・限られた空間で生活を完結させやすい
- ・人の出入りの管理がしやすい



【ユニット共有空間の構成図】
ユニット間のスタッフ連携がしやすい配置としながら、単独にも機能が利用できる構成の提案

動線の分離とゾーニング

新型コロナウイルスの患者を受け入れるにあたり患者、スタッフ動線は、診断し病室に至るまでできるだけ独立した動線が求められます。また、病棟への給食の下膳、廃棄物の搬出動線などもできるだけ他と交わらない工夫が必要です。



【ポイント】

- ・感染診察室、画像診断検査室等への動線が他の患者動線とできるだけ交差しない
- ・新型コロナウイルスの場合、病棟の一定エリアの動線を他と分けることができる
- ・グリーンゾーンとレッドゾーンの接点は防護服の着脱ができるスペースがとれる
- ・レッドゾーン内で物品保管や汚物処理、スタッフ休憩、患者の入浴ができる
- ・給食の下膳、廃棄物の搬出経路、保管についてもできるだけ

【某病院の動線とゾーニング】

ディテールのこだわり

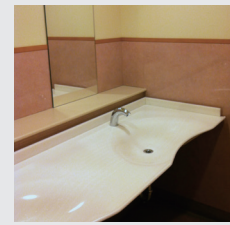
適材適所で標準予防策がとりやすい設え、感染リスクの高い部位の清掃性の高さが持続的な感染症対策では重要と考えます。ディテールのこだわりが発揮される部分です。



【PPE 収納】
病室近傍の洗面スペースに付属して個人防護具を保管できる収納を設ける



【床巻き上げ】
床シート材仕上げを巻き上げ、床壁に入隅をつくらず清掃性を向上させる



【一体型洗面台】
オーバーフローや壁との間のシールなし、車椅子使用者も使いやすい

■これからの医療福祉建築

今後ウイルスと共存せざるを得ない未来が予測されます。「新しい生活様式」に代表されるような私たちの行動変容が求められていますが、医療福祉建築も大きく変わっていくべきでしょうか。

私たちは、この状態が続く予測があるからこそ、平時と緊急時の対応を柔軟に行き来できることが求められていると考えます。状況の良い時は、対面で面会でき、状況が悪い時には、十分な離隔をとり、分散して活動ができるような空間や動線、しつらえなど運用の変化に柔軟に対応できる予備的、可変的な空間づくりを意識していくべきと考えます。

平時であれ感染症対応時であれ、医療福祉建築はそこで療養する人、働く人にとって安心でき快適で豊かな空間であるべきことには変わりはありません。その基本を阻害することなく、将来起こりうることについても考えを巡らせ、それをクライアントと共有し運用を含めて構築していかなければならないと思いを強くしています。

がん・感染症センター東京都立駒込病院の感染症病室の陰圧化改修

がん・感染症センター東京都立駒込病院では、感染症病棟全体の陰圧化はできていたものの一部の病室で廊下と病室間に差圧がない状態でした。新型コロナウイルスへのさらなる対策として病室の改修工事が行われました。

【改修の目的】

感染症病棟の病室を廊下に対して陰圧(2.5Pa以上の差圧)となるよう改修し感染対策を強化。

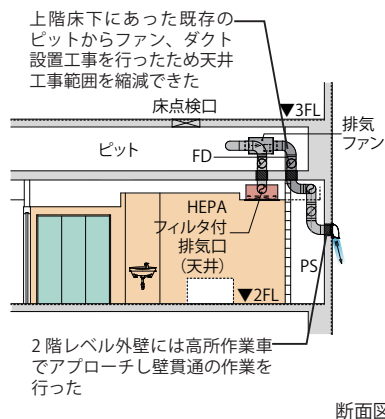
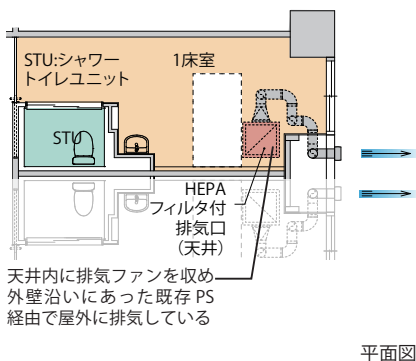
【改修前】

病棟自体が一般病棟に対して陰圧となっていたが、廊下と一部の病室の間に差圧がなかった。

【改修内容】

各病室に個別排気ファンを設置、へパフィルター付き制気口より室内空気を取り込み外部へ排出。廊下と病室の間に差圧計を設置、10Paの差圧を確保。

【工期】2020年8月~10月



美馬 正尚 建築家に求めるものは、格好良い建築をつくることや目新しい建築をつくることなど様々ありますが、私は居心地の良い空間の提供と、自然を体感し五感に働きかけるような建築をつくることだと思います。このように考えるようになったきっかけはいくつかありますが、今回は2点紹介します。



1つ目は私が学んだ大学の教授の一言です。大学1年の最初の設計実習で住宅の課題を行いました。「ビールを飲んで居心地のよい空間を作りたくはないか。」という言葉が今でも心に残っています。他の設計実習の時にも同じようなことを言っていました。また、教授が設計した美術館のライブラリーは言葉では言い表せないほど居心地の良い空間でした。私もこのような空間をたくさんの人に感じてもらえるように設計していきたい。

2つ目は親戚の入院です。親戚が入院した病院は事務所が設計した西神戸医療センターでした。親戚がいた病室は個室的多床室という4床室の廊下側でした。廊下側にも窓があり、光、風、外の風景を体感できました。その親戚もこれらを体感できたことは本当によかったと言っていました。このように、自然を体感し、五感に働きかけることは大切だと感じました。

実際に事務所に所属し、このような建築をつくるには様々なディテールの検討やアイデアがあることが分ってきました。まだまだ、理解できていないことがたくさんありますが、建築家として貪欲に仕事に取り組んでいきたいです。

松田 大作 建築家は職業ではない、生き方である。大学の恩師の言葉である。すなわち私の建築家像とは、私の生き方に他ならない。大して人様に誇れるような生き方ではないが、基本は面白いこと、そして人を驚かせるようなことを大事に思いながら生きてきた。この面白くというのが自分にとって大変で、



すぐ飽きる。仕事が面白くないことも多々あったが、そういう場合は、何か楽しむことを阻害する要因があり、それを受け入れ自分が変容していくことを楽しむことにした。建築も同じである。様々な要因（予算、敷地、重力、人とのコミュニケーション）があり、それらを変容させ、続けることで人の期待を超える建築を作っていきたい。

もうひとつ恩師の言葉がある。建築家には二つの力が必要で、それは建築力と建築家力である。建築力とは言わずもがな設計する力、構造、設備を統べその答えを紡ぐ力であり、建築家力は謂わばコミュニケーション能力である。前述の建築家像は、コミュニケーションの力であるが、一方の建築力は、おそらくは個々人の中にある。食べたもので自分は出来上がるが、建築は自分が見聞きしたものを統べることで作られる。

未だに恩師の呪縛から解き放たれていないのもおかしなことかもしれないが、三つ子の魂百まで、初心を忘れることなく、設計の楽しさを糧とし、建築を続ける力をこれからも持ち続けていきたい。Workaholicではなく archiholicとして。

編集後記

令和2年3月2日、新型コロナウイルス感染拡大防止のため全国の小中高校に休業要請が出されたところから、当社でも急場のテレワークシステムを構築、緊急事態宣言後はほぼ役員と部長のみが出社の体制が取られました。当時、工事現場が直ちに止まることはなかったものの、中国からの資材供給がストップするなどの理由で、竣工の目途がたたないプロジェクトが多くありました。

年の初めに考えていた本誌の企画も進まず、一時は、本号は成立しないのではないかと考えていました。結果として若干の工期の遅れはあったものの、今年完成を予定していたプロジェクトはほぼ竣工にこぎ着け、このような形で紹介することができ感慨深く思います。

コロナ禍によって、慣れないテレワークや遠隔コミュニ

ケーションを試行錯誤する中で課題や反省点も多くありましたが、それを糧に、新たな仕事の仕方や人と人との関係の構築に踏み出すことができたことも事実です。人は逆境の中でしか本当には変わらないと言います。持続可能な未来のためには、従来あったものや方法にしがみつかず、常に形を変えていくあり方も必要なのかもしれません。特に私たちの仕事は、取り扱うものが大きく素早い変化が難しい分野ではありますが、本質を大切にしながらも、常に柔軟な姿勢をもってものづくりに取り組んでいきたいとの思いを強くした号でした。

高橋 良江

社外報 2021 Vol.22
発行年 2020年 冬
発行 株式会社 共同建築設計事務所
編集 高橋良江 小林千絵子 高瀬敦



株式
会社

共同建築設計事務所
Kyodo Architects & Associates

<http://www.kyodo-aa.co.jp>

□本社 〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町 4-10 TEL 03-3359-6431 FAX 03-3359-6449
□東北支社 〒980-0022 仙台市青葉区五橋 1-4-24 TEL 022-722-0915 FAX 022-722-0917
□関西支社 〒533-0033 大阪市東淀川区東中島 1-17-18 TEL 06-6195-3621 FAX 06-6195-3622
□九州支社 〒812-0013 福岡市博多区博多駅東 3-5-16 TEL 092-473-7370 FAX 092-481-3298

